中央公会堂から「なにわの企業が集めた絵画の物語」展

子どもたちがアートに親しむプログラム

フィランソロピー（Philanthropy）とは聞き慣れない言葉だ。しかし、大阪人は誰もがその恩恵にあずかっている。

最も有名なのは、今年が開館100年となる大阪市中央公会堂である。明治42（1909）年、渋沢栄一を団長とする海外視察実業団に、株式仲買人で北浜の風雲児と呼ばれた岩本栄之助が参加し、米国における公共施設の立派さと、富豪たちによる慈善事業・寄付の習慣に感銘し、わが街である大阪市に、公会堂建設のための100万円（現在の50億円相当）を寄付した。他にも、住友家が寄付した大阪府立中之島図書館、大阪市立美術館用地と慶沢園などもあるし、綿業会館も、東洋紡績の岡常夫の遺族からの寄付だ。

寄付の根底にある博愛や人類愛などに基づいて純粋に人々に奉仕しようとする精神をフィランソロピーと呼ぶ。有名な例では、ロックフェラーやカーネギー、ビル・ゲイツがいるし、我々のような庶民による個人的な奉仕にもフィランソロピーの精神は発揮される。

ご存じのように大阪では、江戸時代、幕府の架けた公儀橋と町人が架けた町橋があった。天明7（1787）年の橋の総数155橋のうち、公儀橋はわずか12橋で、残りは町橋である。町橋を代表する淀屋橋や心斎橋、太左衛門橋などは町人の名が付けられ、そこに大阪人としての思いがこもっている。

かつて長堀川には、島之内で病院を経営していた藤中泰先生が明治41（1908）年、私費で架けた藤中橋があった。家から病院に通うのに便利だから架けたというが、照れてそうおっしゃったのだと私は思う。自分の名の橋を残すなど、大阪人としてこんな誇らしいことはない。

この10月4日から18日まで関西経済同友会主催で、中之島の北岸、ほたるまち（福島区福島1丁目）の堂島リバーフォーラムで開催される「なにわの企業が集めた絵画の物語」展もフィランソロピー精神の表れだろう。（右図チラシ）

公会堂建設のために多額の寄付をした岩本栄之助

1回目の試みで点数も限られるが、会社帰りに気楽に名画鑑賞できる場を提供することを目的に夜8時まで開館し（最終日は6時閉館）、関西・大阪21世紀協会の運営協力により企業16社が所蔵する、ロートレックやローランサン、黒田清輝、藤田嗣治（つぐはる）、山口華楊（かよう）などの24点が展示される（会期中無休・入場料500円、中学生以下無料）。

また、京都造形芸術大学アートプロデュース学科の伊達隆洋先生と学生を中心に、小学生を招待して「対話型鑑賞法」による鑑賞プログラムを展開する。幼少期に美術館・博物館に連れて行ってもらった人は、大人になって自分も子どもたちを館につれていくことが海外では分かっている。幼少期の教育が子どもの将来に大きな影響を与えることを再認識してほしい。運営側も展覧会での教育成果を、三年後開館の大阪新美術館（仮称）のプログラムに活かせるよう提言したいという。

活発な文化芸術活動が、世界的に都市の活力や居住性の向上に関係しているのは言うまでもなく、京都や兵庫に比して美術館が少ない大阪で、企業が新美術館建設を機に積極的に動き出したのが心強い。

フィランソロピーの精神は、人類愛を根底として個人も発揮できる。戦前から目先の利益だけで文化芸術に冷たい「物質の塵都」（伊達俊光『大大阪と文化』）と言われてきたこの大阪に、美術館建設を機に文化芸術に新しい風が吹くよう、ご支援をお願い申し上げます。

筆者プロフィール
橋爪 節也　はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。